

ラジオ放送
〈平成31年4月～令和元年6月放送分〉

ON AIR



金光教の声

No.427

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- お弁当の話
兵庫県・尻池教会 谷口信一 *page 1*
- 私の心が変わると…(信心ライブ) *page 6*
- 和賀ちゃん、笑顔をありがとう
愛知県・額田教会 河邊芳美 *page 10*
- 幼稚園での出来事
香川県・多度津教会 玉城真紀子 *page 14*

<金光教案内>

☞ 作家・かんべむさしさんによる金光教の紹介

- かんべむさしの金光教案内 第1回 *page 19*
- かんべむさしの金光教案内 第2回 *page 23*
- かんべむさしの金光教案内 第3回 *page 27*
- かんべむさしの金光教案内 第4回 *page 31*

<先生のおはなし>

- ラグビー部のS君と(信心ライブ) *page 36*

<昔むかし>

☞ 金光教的むかしばなし

- 言葉足らず *page 40*
- 市助と笛 *page 44*
- 生け花くらべ *page 48*
- 3本の桜 *page 52*

《先生のおはなし》

「お弁当の話」

兵庫県・尻池教会 しりいけ
谷口信一 たにくちしんいち

今日お話しくださるのは、金光教尻池教会の谷口信一さんです。タイトルは、「お弁当の話」。

今から30年くらい前のことです。

おはようございます。パーソナリティの大林 おおばやし 誠 まこと です。

お弁当といえば、皆さんは、どんな思い出がありますか？ 遠足や運動会に作ってもらった時なんかは、ふたを開ける瞬間、わくわくしたのではないのでしょうか。

今も毎日お弁当を作ってもらっている人も多いと思います。でも、お弁当箱という限られた空間に、栄養や色合い、好き嫌いを考えながら、おかずを詰めていくのは、とても大変なことだと思います。

私は、中学・高校、そして専門学校の間、お昼ご飯は母にお弁当を作ってもらっていました。当時、母は、家で父の仕事を手伝ったり、家庭用の畑の手入れをしながら家事をしていました。お弁当には定番の卵焼きと、色々なおかずが入っていて、ずっと8年もの間、本当に休みなく作ってくれました。私自身、8年の間にはいろんなことがありました。

部活動は軟式テニスをしていたのですが、早朝練習で朝早く学校へ行き、夜はへとへとになるまで頑張りました。試合に負けても、試合に

出られなくても、母はお弁当を作ってくれました。

勉強の成績は良い方ではありませんでしたが、とことん悪くなった時もありました。いじめに遭って学校へ行くのが怖い時もありました。出来もしないのに、どうやって復讐してやるのかと考え込んだこともありました。機嫌が悪く、腹が立ってばかりの時も、失恋してものすごく落ち込んでしまった時も、受験で悩んでいる時もありました。どんな時も母は変わらずお弁当を作ってくれました。

母自身が調子の悪い時もありました。風邪をひいたり、けんしゅうえん 腱鞘炎で腕が痛い時も、父が入院して家事が大変な時も、変わりなくお弁当を作ってくれました。

本当にいろんなことがありました。だけど母がお弁当を作ってくれることは変わりませんでした。

ある時、弟がこんな話をしてくれました。弟が高校生の頃、学校から帰ってきて弁当箱を母に返すと、母に、「あんた間違えて、お弁当持っていったやろ」と叱られたそうです。弟にしたら、間違えたといっても中身も同じような物ですから、「そんなに怒らなくても……」と思ったようですが、母は、「一つ一つに、その子その子への祈りを込めて作ってるんやからな。だから弁当は一つ一つ違うんやからな」と言ったそうです。

そんな思いで母がずっと弁当を作り続けてくれたのかと、心から「すっごいなあ」と思

いました。びっくりしました。うれしかったし、
ありがたいなあと思いました。そこで母に、「今
までお弁当作ってくれてありがとう」と言いま
した。

それからは、台所まで弁当箱を持って行って、
水で流して、母に、「お弁当ありがとう。おい
しかったで」と言うようになりました。私が毎
日毎日言うものですから、弟たちが、「お兄ち
ゃん、ちょっとわざとらしいわ」と言うことも
ありました。だけど、母は、「そんなことない。
お母さんはうれしい」と言ってくれて、「明日
は何を作ってあげよ」と言ってくれたりしまし
た。

それまで、私と母との間柄は、悪くはなかつ
たのですが、「ありがとう」とお礼が言えるよ

うになってからの間柄は、さらに深まったと思
います。

母は、金光教を信仰する家庭で育ち、同じく
信仰をもつ父と結婚しました。そして、第1子
を早産で亡くしてしまいました。その後、私
を含めて3人の男児を産んでくれました。

私たちを育てる時には、毎日神様に、「元氣
で頭の良い、真面目で素直で、神様のお役に立
たせていただき、皆様に可愛がっていただき、
感謝を忘れない、心の優しい子どもにお育てく
ださい」と欲張って、いっぱいお願いしてきた
そうです。

そして私たちは、そんな母の信仰による温か
い雰囲気と親心に包まれて育ちました。

特に秀でたところや取り柄があるわけではな

い私を、母親が大事に思ってくれている。だから私は、「自分自身を大切にしよう」と思えるようになったのだと思いますし、祈られている自分を実感できる時ほど、幸せな時はないと思うのです。

そして、そんな母の姿の奥に、私は神様の親心を感じるのです。

金光教にはこんな教えがあります。「神様は親、人間は子、親子の情はどこまでも変わるものではないぞ。親神様は人間氏子がかわゆうてなられぬのぞ」。

弁当を作り続けてくれた母の姿を思うと、神様もずっとずっと母のように私のことを祈ってくださってきたのだと、よく分かります。

それこそ、私が母の思いに後から気付いたよ

うに、神様も私が気付くずっと前から、私のことを祈り続けてくれていたのでしょう。

そんな神様の親心に気付かせていただいて、幸せを感じながら、母にも、神様にも、喜んでもらえるような日々を過ごしていけたらいいなと思っています。

いかがでしたか？

谷口さんは、お弁当の中に、お母さんの親心と、さらにその奥にある神様の親心を感じ取っていかれました。

目に見えないものを見る、そんな心の目を開けば、私たちの毎日の食事も一層おいしく、ありがたくなるでしょうね。

今日も放送を聞いていただき、ありがとうございます

ございました。



「私の心が変わると…」

おはようございます。

今日は、滋賀県、愛知川教会えちがわの教師・嶋中しまなかまさ子さんが、平成30年4月に金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

このお話は50年ぐらい前の体験談です。嶋中さんは次のようにお話されました。

母は、私が物心付いた頃から、自律神経を失調して、精神的に不安定な状態が長く続いており、7人姉弟の一番上の私が、9人家族の家事などを手伝わなければなりませんでした。

それまで私は、自分のことばかり考えて、母

のことを理解しようとする気持ちはこれっぽっちもありませんでした。実は、私は母が精神病院に入院して以来ずっと、1年近くも見舞いにも行かず、ほったらかしにしていました。

だけど、金光様の教えに触れる中で、私の中に隠していたものをえぐり出されるような気分になりました、「母親のことを願えずに、どうして自分が助かるのか。自分を見詰め直さなければ、今後も心からの助かりはない」と強く感じたのです。

そして、「これを機会に、親孝行な私にならせてください」と真剣に神様をお願いいたしました。

振り返りますと、それまでの私は、ついつい母の言動に腹を立てて、文句ばかり言っており

ました。すると、気が立っている母は、「あんたは気が変や！」と言って、私の顔をピシヤツとたたくのです。私は、たたき返しはしませんでしたが、本当に腹立たしく、情けない気持ちでいっぱいでした。

でも、そんな母に対しても、父は違っておりました。父が後日、「私は家内からたたかれたことは何度もあるけれども、家内を一度もたたいたことはない。家内は子どもの世話も出来ず、ずっと悪い状態でした。人心で考えたら離縁しなくなるようなところですよ。けれども、昭和20年の終戦の年に初めて出会って結婚式を挙げた時に、家内のお母さんから、『宣廣のぶひろさん、娘をどうぞよろしく頼みます』と一生懸命にお願いされた。たとえ今こういう状態になっても、

相手の親にとっては大事な娘ですね。神様から見られたら、『皆、かわいい神の氏子、内の子』だとおっしゃっておられる。そう思ったら、離縁どころではないと大事にさせてもらえた」と吐露しているのです。本当に辛抱強い父でした。

さて、その後、改心した私は、思い切って母の面会に行きました。

母は私の顔を見るなり、「まさ子ちゃん！こんな所に居たくないの。早く家に帰りたい」と言っていて泣き出しました。それを見て、私も思わず、「お母さん」と抱きつきたくなりました。でも、今までそんなことをしたことがありません。どう言ったらいいのか戸惑いつつ、私はその様子を見ながら、心から母を可哀想と思いました。父に、「お母さんをすぐに退院させて

あげて」と頼みました。私がいつも母とよくけんかしているのを見て、父もさぞつらかったと思います。しかし、その私が突然、「何でもするから、すぐに退院させて」と頼むものですから、きつとビックリしたことでしょう。

母はまだ十分回復はしておりませんでした
が、その後、約1年ぶりに我が家に帰ってまいりました。

退院した時、母は49歳でした。相変わらず何もしないで、ブツブツ言っている状態でしたが、その時の私はもう、母のそういう態度に翻弄ほんろうされることはなくなり、母が理不尽なことを言うても、反発もせず、「ふんふん」と聞くように心掛け、気持ちよく家事をさせてもらっておりました。

そのようにして過ごすうちに、ふと気が付きましたら、いつの間にか、母がお風呂を沸かしたり、機嫌良くご飯も作ってくれるようになってまいりました。そして、長年病んでいた母の姿はすっかりどこかに消え去っていき、当たり前前の会話ができる母になってきたのです。

本当に、どんなにうれしかったことでしょう。もうありがたくて、ありがたくて。そこまですくなるなんて思いもしませんでした。

私は、「本気で母との間柄をおかげを頂きたい」という「私の心の改まり」を、神様がしっかりと受け止めてくださり、結果、「願い以上のおかげを下さったのだな」と感涙するような思いでした。

いかがでしたか。

最初はお母さんの病気を受け止められなかった嶋中さんでしたが、金光様の教えに触れるうちに、「母親のことを願えずにどうして自分が助かるのか」と、自分を見詰め直されました。

また、お父さんの、お母さんに対する思いを知って、「これを機会に、親孝行な私にならせてください」と真剣に神様をお願いしたとおっしゃいます。

そうしてお母さんに対する向き合い方が変わりました。すると、お母さんが変わっていきました。嶋中さんの信心の実践によって、お母さんも助かり、嶋中さん自身も助かっていったのです。

私たちの日常生活でも、こちらの心の持ち方

が変われば、周りの状況が変わっていくということがあるように思います。皆さんもぜひ実践してみてください。



《先生のおはなし》

「和賀ちゃん、笑顔をありがとう」

愛知県・額田^{ぬかた}教会 河邊^{こうべ}芳美^{よしみ}

金光教の教会に奉仕する私は、男の子と女の子の、2人の子どもを授かりました。

下の女の子はダウン症で、その上、心臓に障害を持って産まれました。

妊娠4カ月の時に産婦人科の先生から、「赤ちゃんの首が太いから、5、6カ月になったら、大学病院で検査を受けなさい」と言われ、さらに、「心臓の音も悪いようです」とのことでした。ぼう然となって教会に帰ったのを覚えております。

教会の玄関に入るとすぐ、カレンダーに書いてある教祖様の教えが目飛び込んできました。そこには、「子を産むはわが力で産むとは思うな。みな親神の恵むところぞ」とありました。

「そうだ。神様から頂いた命だ。何をうるたえているのか」と思い直し、産ませていただくと思いました。

1カ月後、大学病院で検査を受けると、重度のダウン症だと言われました。通っている産婦人科の先生は、「ダウン症だからという理由で墮胎はできない。母親が精神的に育てられないとか、経済的な理由なら墮胎できます。いずれにしろ、1週間のうちに産むか産まないか、早く決断してほしい」と言われました。

私は、神様からお恵みを頂いた子であるし、お腹の中ですでに動いていて、墮胎するのは可哀想と思いました。また、友達夫婦が障害のあるお子さんを育てていて、夫婦の生き生きとした様子を見ると、神様から、何か広大なお働きを頂いたのだと感じていました。私たち夫婦も子どもを通して仲良く助け合い、信心を深めたと思います。

その中で、上の息子の将来も考えました。親が死んだら将来的に息子が妹を見るだろうが、息子にも息子の人生があるから負担は掛けたくはない。ゆえに親は早く死ねないとか、また結婚ができるだろうとか、色々な角度で考えました。でも、その時はその時、神様に祈れば神様が良いようにしてくださいさる。墮ろして後悔は

したくない。それに産まれてくる子も外の世界を見たいだろう、その方が幸せだろうと思いましたが。そして、家族からも産むことの了解を得られ、胎動がある度、元気で動いてくれていることや、神様とこの子のおかげで妊婦にならせていただいていることにお礼を申しながら、お腹をさすりました。

4月13日、可愛らしい女の子が産まれました。名前は「和賀菜」と名付けました。和賀菜の「和賀」は、平和の「和」と、賀正の「賀」と書いて、和賀と読みます。

この「和賀」という字は、金光教では、自分の心が和らぎ喜ぶことを指します。私自身が、この先子どもにいかなる障害があろうとも、和らぎ喜び、お礼が言えるようにと、自分の戒め

として、また、子ども自身が、この世に生まれてきて良かったとお礼が言えるようにとの願いを込めて、そして、ふと家の畑を見ると菜の花が咲いていたので、「和賀菜」と名付けました。

産まれてすぐ、娘は心臓の手術を受けなければならず、心が痛みましたが、手術ができる体力を頂いていること、手術ができる技術があることに感謝しました。

結局3歳まで、毎年心臓手術を繰り返し、4回も胸を開きました。また風邪を引く度、入院をしましたが、元気いっぱい、心臓が悪いとは思えないほど、いつも飛び跳ねていました。

成長は健常児に比べるとゆっくりですが、運動面が発達すると、言葉の発達や生活面で、出来ることが増えてくるということが分かりまし

た。障害のある子を持つてみて初めて、健常児の息子はどれだけおかげを頂いているのかと計り知れず、感謝が足りない自分だったと気付かされました。

病氣と闘って入院が多かった娘でしたが、自分から、「我慢、我慢」と言って点滴の注射を泣かずに受けたり、頑張り屋で愛嬌あいきょうがあり、明るいのです。

そして、学校の先生からは、「和賀ちゃんは優しい心で人をいたわることができますね。私が疲れていると、そつと後ろに回って、肩をもらんでくれました」と教えてもらい、私自身も、心の優しい、笑顔の絶えないこの子のおかげで、安らぎをもらえ、助けられました。

そんな娘も、3年前、感染症にかかり、敗血

症で亡くなりました。11歳という短い命でしたが、みんなから、「和賀ちゃん、和賀ちゃん」と愛され、可愛がられた一生でした。

いろいろな病気と闘ってきた娘ですが、もしかしたら、もっと過酷な病気にかかっていたかもしれませぬ。そして、妊娠するといつても、いろんな条件がそろわないと妊娠はできません。そのお働きを下さる神様のおかげの中で産まれてきて、神様のお働きの中で亡くなったのだと思います。

娘のおかげで、障害という、今まで知らなかった世界を見せていただき、心臓のいろんな病気を持った方たちとも出会え、また、多くの方に支えられ、健常児とは違う世界から、世の中を見る事ができて、改めて、人への思いや

りや優しさを育てていただいたように思います。

娘と共に歩んだ11年間は、私の掛け替えのない一生の宝です。

みたま神霊となった娘が喜んでくれるように、一層信心に励みたいと思います。

《先生のおはなし》

「幼稚園での出来事」

香川県・多度津教会 玉城真紀子

私は、結婚を機に九州から四国の地へ参りました。5年が過ぎ、長男が4歳、次男が1歳の頃、夫が東京に転勤することが決まり、親子で引越すことになりました。

慣れない土地での生活に不安はありましたが、都会での生活に期待もありました。長男は新しい幼稚園にもすぐ馴染み、家を行き来する友達もできて、楽しそうでした。

ある日、幼稚園のお迎えに行き、次男を園庭で遊ばせていると、「下のお子さんは幼稚園の保険に入っていないから、園児以外は遊ばせな

いでください」と、PTAの役員のAさんから注意を受けました。前に通っていた園では自由に遊んでいたのが驚きました。そう言われればそうかなと思いましたが、Aさんの強い口調に戸惑ってしまいました。

それ以来、お迎えの時はなるべく時間ギリギリに行つて、遊びたがる次男を抱っこしたままあやすようにしていました。

ある日、テレビで有名な工作タレントのお兄さんが幼稚園の授業参観にやってきました。親子で楽しく工作し、出来上がったところでお兄さんが、「では、ステージに上がつて遊びましょう。一緒にやりたい人、手を挙げて」と声を掛けると、たくさんの子どもたちが手を挙げました。すると、何と私の息子が選ばれました。

恥ずかしそうにしながらニコニコとステージに上がり、タレントのお兄さんと遊んで、最後には親子で写真も撮っていただき、とても楽しい時間でした。

後日、母親だけの親睦会があり、子どもたちを夫に預けて参加しました。アルコールも入り、楽しく過ごしていたところ、Aさんが私の前に座って、「あなたのお子さん、少し目立ちすぎよ。転校してきたばかりなんだから、もう少し大人しくしたら」と言われました。工作教室の時にステージに上がったこと以外にも、物怖じせずに過ごす息子のことをあれこれと言われたのです。前回は私の行動を注意されたのですが、今度は息子のことを言われ、驚くとともにショックを受けました。

仲良しのお母さんに相談すると、「私も同じようなことがあったよ。Aさんは自分の娘が大人しいので、いつももつと前に出たらと、歯がゆく感じているのよ。気にしないで」と言ってくれました。

しかし、このようなことが重なり、私にしてみれば楽しく過ごしている息子に、幼稚園での行動を変えるようにと注意などできるはずもなく、その後はなるべくAさんに会わないよう、会えばまた何か言われるという気持ちになり、自然と避けるようになっていました。

そんな私の気持ちを感じたのでしょうか、時々息子から、「送り迎えの時、もつとニコニコして」と言われるようになりました。

ある日、Aさんから電話が掛かってきました。

ドキドキしながら電話に出ると、内容はAさんの娘の歯ブラシ袋が無くなり、息子のカバンに紛れ込んでいないかという問い合わせでした。すぐに確認し、ホッとしながら、「入っていませんよ」と返事をしました。

次の日、幼稚園の送り迎えはその話題で持ち切りでした。かなり多くの方に問い合わせをしたらしく、皆一同に、「無いよね」と言っていました。

その時、Aさんの友人が、「歯ブラシの袋くらい無くなっても気にしなくていいじゃない」とAさんに言いました。

Aさんは、「私は、物の金額ではないし、犯人探しをしているわけではないのよ。いつも娘に、自分のものを大事にする、大切に使いな

いよと伝えている。それを分かってほしいのよ」と話していました。

私はその話を聞いてハッとしました。Aさんが人を責めているとばかり思っていた私には意外な言葉でした。

私が幼い頃からお参りしている金光教では「実意を込めて、全てを大切に」ということをとても大事にしています。「人も物も、全てを大切にする姿勢が大事です」と言われています。それなのに、歯ブラシの袋を無くした問い合わせがあつた時、それぐらいのことで、と軽く見ていました。

落ち着いて考えてみると、Aさんは娘さんをととても大事に育て、PTA活動も、積極的に動かれています。私は少しだけ嫌なことを言われ、

もうそれだけで避けようとしていました。Aさんの良いところを一つも見ようとはしなかったのです。幼稚園に息子を送っていくことさえ嫌になりかけていました。

通園する息子本人は幼稚園が替わっても、毎日元気に明るく過ごしているのに、私だけが前の園と比べて、前の方が良かったと、比べても仕方がないことを悔やんでいました。最初の注意を受けた時も次男がけがをした時のことを考えて言うてくださったのに、そう受け取ることができていなかったなあと、私の心の向きが少し変わりました。

また、私が悲しい顔や沈んだ様子でいることに、どれだけ子どもに心配を掛けていたのかなと思いました。

毎日の生活には、いろいろな出来事があります。しかし、息子が幼稚園に行きたいと思い、幼稚園に通えていること。健康であること。経済的に幼稚園の費用も出せていること。家族仲良く過ごせていること。心の向きを少しだけ変えると、肩の力も抜けたようで、今まで見えていなかったものが見えてきました。Aさんとも向き合えるようになりました。

これからも、全てを大切にして、周りの方と向き合いながら、明るい笑顔で過ごしていきたいと思えます。



《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内

第1回」

おはようございます。かんべむさしと申します。職業は作家でございまして、日本文藝家協会と、日本SF作家クラブの会員になっております。いわゆる「団塊世代」の一員で、趣味は上方落語の鑑賞と読書という、そんな私が、今朝から週1回で4週にわたって、お話をさせていただきますことになりました。どうぞよろしく、お願いいたします。

で、「かんべむさしの金光教案内」というタイトルの付けていただいておりますが、そう立

派なことを言える人間ではありません。自分が経験したこと、感じたこと、思っていることを、正直に、ありのまま、お話させていただくだけでして。口幅つたい言い方になりますが、作家的社会的な責任という意味からも、そうするのが本当だと思っております。

そこで、早速話に入らせていただきますが、実は私、40代の半ばまで、金光教とは何の関係もない人間だったんです。生まれ育った家の宗教は仏教でしたし、お正月には近くの神社へ初詣に行っていましたし、クリスマスには子どもたちとケーキを食べるといいう、まったく平均的な日本人だったんですね。

ただし、気質としては、自分でも嫌になるほどの心配症でした。学校を出てからは小さな広

告代理店に勤めてたんですけど、常に、「この先、自分はどうなるのか」という不安に襲われてました。月給も安かったですからね。

だから、不安解決のヒントを求めて、安心・自己実現・願望達成法の本なんかはよく読んでおりました。そしてその中に、漫画家のサトウサンペイさんが書かれた、『ドタンバの神頼み』という本もあつたんですが、これで私は初めて金光教を知つたんですね。

それも、ちよつとびつくりした知り方でした、書き出しの部分に、「その教会は大阪中之島の近くにあつた。大きな総ひのき檜造りの建物で、2層の銅板ぶきの大屋根が、美しい勾配を見せていた」と、そう書いてある。

サトウさんが子どもの頃、お母さんに連れら

れてよく行つていた、金光教たまみず玉水教会という教会なんです、さつき申しました、私が勤めた広告代理店のすぐ近くにありましたので、建物だけは見て知つてたんです。「ああっ。あそこか！」と、それでびつくりした。

ただし、そのサラリーマン時代には、宗教のシュの字も考えてませんでしたから、別に何とも思わずに、その前を通過してた。まさかその20何年後に、自分がそこへ通うことになるうとは、思いも寄らないことでした。

今考えてみれば、その時代にそこへ通い出したら、脱サラして作家になろうかと考え出した時期にも、あんなに悩み苦しむ必要はなかっただろうなあと思います。何しろ迷つて悩んで病気みたいになつて、大学病院の神経科へ相談

に行ったほどでしたからね。

でも、宗教にも金光教にも、まだ縁が生まれ
てなかったんでしょう。とにかく悩むだけ悩ん
で、27歳の終わりに脱サラをしました。それか
らまあ、こっちも必死でしたし、ちょうどその
時代、1970年代の後半から80年代の初めに
掛けて、出版界ではSFがブームになったりも
しましたので、作家としての仕事は一応順調に
進みました。

私生活面では、結婚して、子どももできた。
もちろん、仕事面で多少の波はありましたけど、
それも自分の力で乗り越えられた。そのまま進
めば、「こんな結構な仕事や立場はないな」と、
そう思えてたはずだったんですね。

ところが人生というものは、そう常に自分に

都合良くばかり進むものではありません。40
代になって、世間でいう「男の厄年」あたりか
ら、公私共に、自分の力や工夫だけでは解決で
きない問題が起きてきました。

簡単に言いますと、仕事面では若い世代の読
書離れが拡大して、出版界全体の業績が低下し
出した。時代背景としては、バブル景気の崩壊
があつて、それもやっぱりマスコミ界全体に悪
影響を及ぼしましたしね。

それから、私生活の面では、母親が年を取つ
て、それにまつわる問題が起きてきました。父
親は早くに亡くなつてまして、実家には母親が
一人で住んでたんです。だから私が近くに住ん
で、折々様子を見に行つたり、用事を頼まれた
りしてたわけです。ところが、その母親が心身

共に老化が目立ち出し、その世話をどうするかという問題が起きてきた。

おまけに身内にトラブルがあつて、母親も心配症でしたから、それを苦にして、私が様子を見に行くたびに、延々と訴えてくる。仕事面の問題を抱えてるところへ、2年3年と母親の泣き言を聞かされ続けて、心が疲れ果てるという状態になつたんですね。

そんな訳で、サトウサンペイさんの『ドタンバの神頼み』、最初読んだ時はびっくりしただけで終わったその本を、改めて読むことにもなつて、今度は、「ひよつとして、この宗教、この教会が、自分の悩みや問題を、何とかしてくれるのではないか…」と、そう思うようになつたんです。

というのが、『ドタンバの神頼み』によれば、金光教は、優しくて、穏やかで、こちらの悩み事を聞いてくれて、その解決を神様に願つてくれるという、そういう宗教らしいなあと感じられましたのでね。

ただし、最初に申しましたように、平均的な日本人でしたから、宗教に対する警戒心や疑いはやっぱり強かった。すぐさまその世界に飛び込むなんてことは、とてもできない。

そこでまず、その金光教玉水教会へ、偵察に出掛けることにしたんですが、来週は、その偵察期間が何と2年に及んだという、そのお話をさせていただきたいと思えます。ありがとうございます。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内

第2回」

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」、その2回目でございます。

先週の第1回目は、40代半ばになった私が、作家としては出版界の長期不況、個人としては母親の老化と身内のトラブル、公私共の問題が続いて解決せず、心が疲れ果てたという話をさせていただきました。

そこで、以前一度読んでいた、漫画家サトウサンペイさんの『ドタンバの神頼み』を改めて読み直し、「ひよつとして、この宗教、この教

会が、自分の悩み事を解決してくれるのではないかと、そう思うようになって、大阪の中島の近くにある、金光教玉水教会という教会へ偵察に出掛けることにした。

ただし、それまで宗教には何の縁もありませんでしたし、心配症で疑い深い人間でもありませんから、その偵察が何と2年に及んだという、そこまでお話しさせていただきました。

さて、それでは私が、「よし。分かった。一応納得もできたから、ひとつこの教会に通わせてもらおう」と心を決めるまでに、なぜ2年も掛かったのかですが、それには大きく分けて、2つの理由があります。

1つは自分の性格として、その世界にまず入ってみるとか、物事を進めながら考えていくと

か、そういうやり方は苦手だということ、たとえアウトラインにせよ、先に知っておかないと安心できないからなんです。まして宗教のことですから、『ドタンバの神頼み』に書いてあることが、「本当なのかな？」という疑いも、やっぱりありましたしね。

そしてもう1つは、「ひよつとして、この宗教、この教会が」と思った、それは本気で思ったことで、もし納得ができたなら、いろんな相談もさせてもらおうと、そう考えてたからなんです。その意味では、私の人生の流れが、ようやく宗教が必要な時期に差し掛かっていたのだと、そう言えると思います。

なのに、ちょっと通ってみて、「やっぱり私には向いてませんでした。さよなら」なんて

ことになったら、40男の姿勢として無責任だし、先方に対して失礼に当たるとも思いました。そんな訳で、納得するまでに2年掛かったという結果になったんです。

玉水教会は大きな教会で、誰でも自由に入力できますので、勝手に内部、金光教では「ひろまえ広前」とか「お広前」と言ってますが、そこに入って長椅子に座って、きよろきよろと観察を始めました。また、表には金光教関係の書籍を販売している施設もありましたから、そこで本を買って読み出しもしました。もちろん、これらは頻繁にはではなく、その気になった時には、ということでしたけどね。

で、そうやって観察を続け、あれこれと本も読んでいった結果、サトウサンペイさんの『ド

タンバの神頼み』に書いてあることは、全て本当のことなのだと思いが付きました。どういことがかと言いますと、ざっと紹介しておけば、次のようなことがです。

まず、金光教は間口が広くて、優しい宗教だということなんです。ただしその奥には厳しさもあるようですけど、とりあえず入門者にとってはですね。それから、他の宗教を否定せず、共存共栄を良しとしています。

また、教会の先生は外に勧誘に出掛けたりはせず、ひたすら教会内に座って、「どうぞ、神様の助けが必要な人をお引き寄せください」と、祈り続けておられるのみです。

そして、寄付や献金の強制がありません。さい銭箱は置いてありますし、「お供え」という

慣習もありますが、どちらも全く自由です。これは、私に通わせてもらおうようになってから20年以上になりますが、その間、教会側からただの一度もお金について言われたことがありませんから、確かなことです。

プラス、いつやめても、何も言われません。お金の面と同じく、これも全く自由です。政治に関する姿勢も、信者各人の自由です。

そして何よりの特長は、参拝される方はどなたでもですが、私なら私が持ち込むいろんな問題、仕事上の悩みとか、私生活でのめ事とか、そういうことを一対一で聞いてもらえて、相談に乗ってもらえること。そして、その問題の解決や、願ひ事の成就を、教会の先生が神様にお願いしてくださるということなんです。

人の願いを神様に取り次ぎ、それに関する神様の思いや教えを人に取り次ぐ。このやりとりを金光教では「取次とりぎ」とか「お取次」と言っておりませんが、そういうことをしてもらえるわけです。というより、それが金光教の根本であるわけです。もちろん、個人の秘密は固く守られます。

とまあ、こういったことを私は確かめさせてもらったわけで、その時どう思ったかと言いますと、失礼な言い方になりますが、「非常に都合のいい宗教だな」と、そう思いました。ずるく考えれば、何か問題がある時だけ教会へ行つて、相談に乗ってもらい、解決を祈ってもらって、後は知らん顔をしてても構わないことになりますからね。

そして実際、私はいまだに、その「都合のいい」面だけを利用させてもらってる部分が大きいという、「あんまり良い信者ではないな」と、自分でも思うレベルなんですけどね。そう思うなら改めるべきなんですけど…。

というところで、時間が来ました。来週は、先ほど申しました、金光教の優しさについて、お話をさせていただきたいと思えます。ありがとうございます。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内

第3回」

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」、その3回目でございます。

第1回目では、私が40代半ばの頃、仕事面でも生活面でも問題を抱え出し、偶然のきっかけで金光教と、大阪の玉水教会という教会を知って、「ひよつとして、この宗教、この教会が、悩み事を解決してくれるのではないか」と思ったことをお話ししました。

第2回目では、その玉水教会に偵察に出掛け出して、「よし。ここへ通わせてもらおう」と

心を決めるまでに、2年ほど掛かったことなどを聞いていただきました。そして、その決心に至った理由の一つは、金光教に優しさを感じたことだとも申しましたので、今朝はそのお話をさせていただきます。

玉水教会の表には、関係書籍を販売してる施設もありますので、偵察期間中、そこで金光教の教典や教祖の伝記などを買って読み出しておりました。その結果、金光教が、江戸時代の終わり頃に、備中大谷、今の岡山県浅口市金光町で始まったこと。それから、教祖様という人は、元は農業をやってた人で、だから参拝者の願い事や悩み事を聞いて、神様に祈ってあげるようになったのは、農家の一部屋だったことなどを知りました。

そして教典にも伝記にも、教祖様と参拝者との接触、神と人を取り次ぐ「お取次」の具体的な例がたくさん出てきます。その中には、以前テレビでやっていましたアニメ番組、『まんが日本昔ばなし』みたいな話もある。

例えば、お百姓さんがすいかの初生りを自宅で神様に供えて、翌日それを持って参拝しようとした。そしたらその途中、巡礼の親子に出会って、夏の暑い時ですから、子どもがすいかを欲しがって泣き出したんですね。

それで可哀想に思って、そのすいかを子どもに与えたんですけど、その結果、自分は手ぶらで参拝ということになってしまった。それを気にして表でもじもじしてましたら、教祖様が出てこられて、「すいかの初生りは、ゆうべ神様

が喜んでお受け取りになった」とおっしゃったという、そんな話があります。

つまり、その人が昨日自宅で神様に供えたことを既に知っておられて、だから手ぶらでも何も気にしなくてよろしい、あなたは良いことをされたのだから、ということなんでしょうね。

当時の農村の夏の光景やその暑さ、せみの声、巡礼の親子の姿とか、教祖様の言葉の優しさや、雰囲気の穏やかさ。そういったことが目に浮かぶようなエピソードで、私、元々こういう話は好きですから、一遍で頭に入ってしまったんですね。そして教典にも伝記にも、こんな話がたくさん出てきて、全体として、優しく、穏やかで、寛容な雰囲気を感じられる。いわば、その点に安心していたというわけです。

というのが、第1回目でも申しました通り、私は心配症の人間です。心配症で、怖がりです。本当に気が弱い。ですから、よく将来への不安に襲われてたサラリーマン時代も、作家という、内実は不安定な仕事に就いてからも、心の奥底では、「頼れる何か」を求めてたんじゃありません。と思います。そしてその何かは、自分が気が弱いだけに、優しく、穏やかで、寛容であることが必要条件だったんだろうと思います。

まして偵察に行き出したのは、仕事面でも生活面でも、抱えた問題がなかなか解決しないという時期ですから、なおさらのことです。一つの言い方をすれば、私と金光教とは、その意味で「相性が良かった」わけです。

金光教は他の宗教を否定しませんし、私も、

「人それぞれ、必要が生じたら、自分に向いた宗教を選べばいい」と思ってる人間ですから、どなたに対しても、「金光教でなければならぬ」と決め付ける気持ちは、全くありません。「私は相性が良かったので選んだんですよ」と、そうお伝えするだけです。

ただし、私は相性がいいから選んだと、自分の側から見てそう言ってますが、金光教の教えでは、本当は「選ばせていただけだ」、神様が金光教に引き寄せてくださったのだと、そういういきさつになるんだそうです。

さて、優しさや穏やかさについてお話をしてみました。それは別にもう一つ、ぐっと引き込まれた要素があります。

玉水教会は明治時代に出来た教会で、初代の

教会長は湯川安太郎ゆかわやすたろうという先生です。その湯川

先生が参拝者たちに、長年にわたってなさった

信心のお話を収録した『湯川安太郎信話しんわ』、信

心のお話で信話ですね、そういう本がありました

で、それも偵察期間中に読み出してたんです。

そしたら、この本が無茶苦茶に面白かったんで

すね。

というのが、お話をそのまま書き取った記録

集ですから、古い大阪弁がもろに出てくる。お

まけに登場する信者さんたちには、大きな商売

をしている家の御主人がいれば、長屋暮らしの貧

しい夫婦もいる。その時代にはまだありました、

大阪相撲の力士まで出てくる。

これも第1回目に申しました通り、私は長年

の上方落語ファンですから、「うわあっ。この

本、上方落語の世界そのままや！」と、興奮し

て熟読することになったんです。その意味でも、

相性が良かったんですね。

もちろん、教典も『湯川安太郎信話』も、本

当はかなり奥の深い内容を含んでるんですけど、

ど、読み出した当初の私にとっては、『まんが

日本昔ばなし』と「上方落語」を思わせる世界

で、実に親しみやすかったんですね。

はい、今朝はここまでとさせていただきます。

ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内

第4回」

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」、今朝が最終回でございます。

これまでの3回では、私が40代半ばに公私共に問題を抱え出したこと。偶然、金光教を知って、大阪の玉水教会へ偵察に出掛けていたこと。その偵察期間が2年ほどに及び、その過程で、金光教が優しく、穏やかで、寛容な宗教であると確認できたこと。そういったことを聞いていただきました。

そして結局、「よし。それでは、この教会に

通わせてもらおう」と決心したんですけど、実はそれまでに、「やつぱり、やめておこうかなあ」と思ったこともあったんです。

というのが、何度も教会の中に入って様子を見て、教典とか伝記とかを読みもしましたが、何か代わり映えがしないというか、何の変化もない気がしてきたからでした。

しかしこれは、私の姿勢に原因があったんですね。つまり、それまでただ観察や確認をしてきてるだけで、教会の先生と一度もお話をしなかつたからなんです。

金光教の根本は、一対一の「取次」「お取次」、私なら私が教会の先生に願ひ事や悩み事を聞いてもらい、それについての神様の思いや教えを伝えていただくという、そういう関係によって

成り立っています。その根本の關係に踏み込まず、ただ眺めてるだけなんだから、変化のあるはずがないんですね。

で、そこに気が付きましたし、公私共の問題を何とかしてほしいという、そういう思いも強くありましたから、ついに決心して、47歳の時、自分の名前や職業、抱えてる問題などを、先生にお話しさせていただきました。

金光教はどここの教会でも、神殿の右手側に教会長なり、その教会に所属しておられる先生なり、常にとなたかが座っておられます。その方に対して、いわば「打ち明け話」をするわけですが、そのことに特に抵抗はありませんでした。病気の時、お医者さんに病状を伝えるのと同じことで、正直にありのままを言わなければ話に

なりませんからね。

そして、いよいよ定期的に参拝を始めたんですけど、その当初は、自分が金光教について分からないこと、疑問に思ってることなどを、よく先生に聞いておりました。

中年になつてからのスタートですから、とにかく早く全体像を理解したかったからですが、金光教では、教会は信心の稽古をする場所、実践するのは、各自の家庭や生活や仕事の場と、そう教えられております。その意味では、私は質問という形で稽古を始めてたことになりましたが、まあ、今考えてみれば、レベルの低いことや愚かなことを聞いてたんだろーなと思います。

それから、自分の抱えてる公私の問題が、参

拝し出してすぐに解決したかというところ、都合よくは進みませんでした。

それは教祖様自身が、「自分の教える道では、物事の解決や成就には時間が掛かる。その代わり、無理がない道だし、神様に解決してもらった難儀は、二度と起きてこない」と、そういう意味のことを言っておられます。

当座の解決、仮の解決ではなく、神様は根本からの解決をしてくださるからだそうですが、この辺りは、私にはレベルが高過ぎて、うまく説明できません。しかし、「なるほどなあ」とは思いました。実際、抱えてる問題にはいまだに続いているものもありますが、「なるほどなあ」という思いを元に、解決と成就を願い続けているという状態です。

その間、母親が83歳で亡くなりましたが、前に申しました身内のトラブルは、まだ続いておりました。私は3人兄弟の末っ子なのですが、そんなこんなで、母親の世話についても、私が長男の役を勤めるようなことになっていた。だから私の家族にも迷惑を掛けました。いろいろな腹立たしいことや悔しいことがあり、母親の告別式の前日、玉水教会へ行つて、広い会堂の長椅子に座つて、長い時間泣いていたことを思い出します。今思えば、そうやって「泣ける場」を与えてもらっていたことも、ありがたいことでした。

で、話を戻しまして、金光教では信心の当座の目的として、目の前の問題の解決や成就を願うのは、現実の生活をしている人間として、当

然のことだと認められております。その意味でも、入門者にとっては安心できる宗教だったわけです。

ただし、それで終わってしまうのではなく、解決や成就に感謝して信心を進め、神様に喜んでいただけるような、そんな生活や人生を目指しなさいとも教えられています。これもまた、本気で考えたらレベルの高い話でして、まだまだ私の及ぶところではありません。

しかし、決心してから今日まで、20何年通わせてもらって、実感していることがあります。それは、自分が教会の先生に対して、あるいは心の中で神様に対してでも、どんなことでも正直に、ありのままをお話しさせてもらえて、この神様に本気でお願いさせていただけるとい

う、「それは、ありがたいことだなあ」という思いです。

ありのままを打ち明けられて、本気でお願いできる。これは大事なことだと思いますので、そういう神様を「与えて」もらえたことは、これはやっぱり幸運だったな、ありがたいことであるなあ、そう思うわけです。

というわけで、以上4回、「かんべむさしの金光教案内」をお聞きいただきました。機会がございましたら、またいつかお話を。ありがとうございます。



《信心ライブ》

「ラグビー部のS君と」

おはようございます。

今日は、愛媛県、金光教三津浜教会みつはまの教師・

高橋たかはし齊せいさんが、平成28年1月に金光教本部で

お話しされたものをお聞きいただきます。

高橋さんは、岡山県金光町にある金光学園高等学校で、ラグビー部のコーチをされています。

そのラグビー部の、ある試合での出来事です。

初めて試合に出場したS君という子がいるのですけれども、そのS君が、ボールを持った瞬間に相手チームの選手からタックルを受けて、倒れたまま動かなくなっていました。

顧問の先生と2人でS君を近くの病院に連れて行きました。診断の結果は、「大きな病院で精密検査を受けてください。確信は持てませんが、ひざの靭帯じんたいが切れていると思います」。

それを聞いて私は信じられない思いだったのですけれども、そばにいるS君のことを思いますと、ラグビーを始めて、これからという時にこんなことになってしまつて、もし最悪、靭帯が切れていたとすれば、今後ラグビーを続けることも難しいかもしれない。せめてわずかでもつながっていてほしいなと思いました。

診察が終わりました。車の中で2時間あまり、S君となりました。車の中で2時間あまり、S君といろんな話をさせてもらいました。

S君がぼつりと、「僕って結構、けがが多い

んですよね」と言いました。「ええ？ どういうこと？」と聞きますと、「僕は1年に1回ぐらい、必ず大きなけがをするんです。何度か骨折したこともあるし、今回のけがも、そういう何かがあるからなんでしょうね」と言いました。

私は、それを聞いた瞬間に、これは彼の今の思いを断ち切ってあげないといけないなと思いました。

心の中で、「神様、これから彼に話をさせてもらいますよ」とお願いして、このように話をしました。

「あのな、S君。自分がさっき言った、必ず1年に1回けがをするというのは、自分の運命とか、何かのたたりとか、因縁のように思っているかもしれないけれど、S君のけがの一つひ

とつは、全く関係ないよ。俺も現役の頃にけがに泣いた方だけど、ラグビーでけがをする時は、そのほとんどが、自分の気持ちが弱気になったり、マイナスに向かった時に起きた。それから人間は、悪いことが続いた時に、なかなか自分で受け止めきれないから、誰かや何かのせいにして、現実から目を背けたり、別々に起きた悪いことをつなげてしまうことがあるけど、その気持ちがまた悪いことを生んでしまうことがあるよ。そうならないためにも、けがをした自分を自分で受け止めて、気持ちをしっかりと持って、けがを治して、またグラウンドに戻ってきてほしい」と話しました。

この日からS君のことが心に浮かんでは、「どうか大事に至りませんように。わずかでも、鞠

帯がつながってますますように。さらにこのけがを
通して、彼の心が強くなりますように」と願う
日が続きました。

数日経って、顧問の先生に連絡を取りますと、
「大きな病院で検査を受けた結果、左ひざの前
十字靭帯断裂でした。彼は今は成長期なので、
時期を見て、いい時に手術をしましょうと医師
から言われた」とのことでした。

それからラグビー部は冬の休みに入りまし
て、年が明けた今年の1月3日のことでした。し
ども、金光学園では毎年その日にOB戦が行わ
れます。

その試合を終えまして、ふと周りを見ますと、
そこには松葉杖をついて、見学に来ているS君
の姿がありました。驚きとうれしさで、「よう

来たなあ」と声を掛けますと、ニコッと笑って、
「ハイ」と答えました。

そのS君の曇りのない表情に、私はS君が車
の中でぼつりと言った、「1年に1度、必ず大
きなけがをする」という後ろ向きな心から、前
を向いて一歩踏み出した、そのように思いまし
た。

S君はこの春に手術をすることが決まりました。
た。そこからリハビリが始まりまして、治療は
長く、苦しいこともあると思いますけれども、
私は私で、S君と関わりながら、S君のことを
神様にお願ひさせていただくこと。それが私に
できる私の務めだと思っております。

教祖様がこういう教えを残しておられます。
「若い者は、本心の柱に虫を入らせなよ」

このみ教えは、若い人たちに対しての神様の

お心配りが込められた教えですが、さらに言えば、若い者の先輩に対しての教えでもありません。

まず先輩が、日常の中で若い者の心をゆがめないように、心を配って育て導いてやらなければなりませんよという教えだと頂いておりません。

つまり、指導的立場にある私自身の心に悪い虫が入らないように、まずは、私自身の心の成長を大切にしなさいと教えておられるみ教えだと私自身頂いております。

いかがでしたか。S君は、その後がんばってけがを克服し、ラグビーを続けて、3年生の時にはキャプテンとなって、チームを引っ張る活

躍をみせました。

子どもたちの心が、悪い心、ゆがんだ心にならないように、神様をお願いしながら、子どもたちに寄り添うこと。同時に、教える立場にある大人自身も、自分の心がそのような心にならないようにお願いしていく。

子どもと大人、お互いに育ち合うことの大切さを感じました。

《昔むかし》

「言葉足らず」

昔むかし、ある村に、源太げんたと与作よさくというお百姓がおりました。2人は幼なじみで、お互いに

「げんさん」「よっさん」と呼び合う仲でした。

ある日のこと、源太と与作は、田んぼの水の見回り当番をしておりました。

源太は風邪気味で、おまけにおかみさんと口げんかをしたせいで、イライラしておりました。与作は与作で、足首を痛めておりましたので、水路に溜まったゴミを取るのに、足をかばい、苦労しておりました。

その様子を見た源太が、
「よっさんよ、そんな足では役に立たん、家に

帰れ」

と言いますと、与作は、

「いや、大丈夫だ」

すると源太は言葉を強めて、

「帰って休め！ そんな足では仕事の足を引つ張る。足が足を引つ張るとはシャレにもならん」

これを聞いた与作は頭にきて、

「帰る！」

と怒鳴り、顔を真っ赤にして、プリプリと怒りながら歩いていると、いつの間にか、村外れの古い小屋の前にはいました。

のぞいてみますと、男たちが、「丁」だの、「半」だのとやっております。

「何だ、ばくちかあ…」と思い、帰ろうとしたところを見つかつて、「賭け事なんてやった

こたあないが、まあ一回……だけ」と思い、懐の小銭を出して賭けてみますと、それが当たり、何と小銭が何倍にもなって返ってきたのでした。

さて一方、遅くまで見回りをした源太が家に帰ると、おかみさんが心配して、

「どうしてこんなに遅くなったのかえ」

と聞きますので、

「よっさんが足を痛めていたから、家に帰して、俺が一人で見回ったでなあ」

「それは良い事をしたよ」

と夫婦で喜んでおりました。

けれども、その晩、源太は熱を出し、寝込んでしまいました。

信心深いおかみさんは神棚に向かい、源太と

与作が早く良くなりますようにとお願いしておりました。

さて数日後、源太は田んぼの帰り道、与作とばったり出会いました。

「よっさんよ、足は治ったのかえ」

けれども与作は、プイと顔を背け、黙って行ってしまいました。

さらに幾日か経った頃、与作が、ブーツと魂が抜けたような様子で歩いております。源太は変だと思い、おかみさんに相談したら、

「それはお前さんが、よっさんを怒らせたのに違いないよ。何か言ったんじゃないのかえ」

源太は、

「そういえば……あの時、俺はよっさんに、確か、『役に立たんから帰れ』と言った。本当は、『足

を痛めているのに気の毒だ。今日は痛くてつらいだろうから、帰って休め』と言うはずが…」

するとおかみさんは、

「またお前さんの『言葉足らず』のクセが出たよ」

「『足が仕事の足を引く張る』とも言ったような…」

「あきれたね。お前さんは言葉足らずのくせに、一言多いんだよ。今からよっさんの家に謝りに行ってきなよ」

おかみさんに引立立てられて与作の家に行きますと、静まりかえっております。戸をドンドン叩きましたが出てきません。

「俺だ！ 源太だ！ よっさん、居たら開けてくれ」

大声で言いますと、やっと与作が出てきました。

源太が、与作の袖をつかんで平謝りに謝りますと、与作は、

「げんさん、俺はもう誰にも合わす顔がない。

俺を心配して、帰るように言ってくれたげんさんに腹を立てて…。あれから俺は、村外れの博打をしてる連中の所へ通うようになってな。だけどある日、賭けに勝つだけ勝って、正義漢ぶって説教しちまって…。ぶん殴られて追い出されてなあ…。(涙しながら)げんさん、あんなことで腹を立ててしまつて、ごめんなあ。許しておくれよ…」

訳を聞いた源太は、

「よっさんよ、俺の言葉足らずで、つらい思い

をさせてすまなかつた。俺の方こそ、許してくれよ」

それから源太と与作は、以前にも増して仲良しになりましたと。

おしまい。



《昔むかし》
「市助と笛」

昔むかし、ある海沿いの村に、働き者の漁師の夫婦がおりました。

市助いちすけという子を頭に、次々と5人もの子どもを授かりましたので、暮らし向きは楽ではありません。父親はなお一層働き、母親は狭い畑を子どもたちに手伝わせ、よく働いておりました。さて、村の人たちが楽しみにしている、お宮の春のお祭りの日が来しました。市助も家中そろって出掛けました。

お宮に着きますと、ちょうどお囃子はやしが始まるところです。人々はドツとどよめきました。市助はそのお囃子の、老人の吹く笛ねの音にすっ

かり引き込まれてしまいました。

「何と美しい音なのだろう！」

もう夢中です。お囃子が終わり、ハッと気が付きますと、さつきまでしつかりと手をつないでいた妹のお春はるがいなのです。

「どうしよう！ どこに行ったのだろう？」

市助はお宮のあちこちを必死で探しました。

やっと見つけた時、お春はるは庄屋様の娘たえの妙と手をつないでおりました。市助は思わず駆け寄って、

「お春、どうしてあんちゃんと一緒にいなかったんだ！」

と言いますと、妙は笑って、

「市助さんがお春さんの手をあまりに強く握るので、手が痛かったそうよ。何に夢中になつて

いたの？」

市助は思わず、「笛の音」と言いそうになりましたが、慌てて口を閉じ、妙にお礼を言いました。

さて、それからです。市助の頭の中は、寝ても覚めてもあの笛の調べが響き渡っておりません。

「笛が欲しいなあ……」と思いました。けれども、その日の暮らしがやっとなという親に、そんなぜいたくなことは言えません。市助は考えて、考えて、考え抜きました。



朝早く、海沿いの川のほとりを通る村人は、

市助の姿を毎日見掛けるようになりました。そうですね、市助の考えたことは、川でシジミを採って魚屋さんに引き取ってもらうことでした。毎日小銭をもらっていたのです。

そんな小銭をためて、あのような立派な笛が買えるのでしょうか……？

ある日、妙が川の側を通り掛かり、市助に目を留めました。

市助は魚屋に行き、小銭をもらった後、家に帰るのかと思いましたが、なんと反対方向のお宮に向かっっていくではありませんか。そうして、今、魚屋からもらった小銭をさい銭箱に入れ、一心にお願いしております。

その市助の声が、かすかに妙の耳に入りまし

た。でも：可哀想だけど、それはかなわぬ夢だろうと思ひ、妙は立ち去りました。

待ちに待った秋祭りの日が来ました。市助は再び笛の音に心を奪われ、もう夢見心地です。

翌朝、例によって川でシジミを採っておりますと、何やら立派な紙入れのような物が、川岸に引つ掛かつておりました。中を見ますと、書き付けのようで、市助には読めない難しい字が並んでおります。市助は、庄屋様の所にお届けに行きました。

それは、庄屋様の所に泊まっているお客様の物で、どこで無くしたか大層困つて探していた、とのことでした。

さて、その日の暮れ時、市助の家に、妙と、何とお祭りの時に笛を吹いていた老人が現われ

ました。老人は言いました。

「市助さん、今日は私の大切な書き付けを届けてくれて本当にありがとう。お礼に、と言つては何だが、私の笛を差し上げよう」

市助は大層驚いて、

「そんな立派な物は頂けません」

すると妙が、

「市助さんは笛が欲しいのでしょうか？ 遠慮せず」

と、ほほ笑みます。老人は、

「市助さんのことは、お妙さんから聞きましたよ。あの書き付けは、私に都に戻るようにというお指図でした。もうどこのお宮でも笛を吹くことはないでしょう」

と、ためらっている市助の手に笛を渡しました。

なおも老人は、

「このお妙さんは、笛も吹きなさる」

市助はびっくりして妙をまじまじと見詰めました。

「お妙さんに手ほどきをしてもらいなされ」

おしまい。



《昔むかし》

「生け花くらべ」

昔むかし、ある町外れに、吾一ごいちという大工職人がおりました。吾一は幼なじみの多助たすけと飲み屋で良いご機嫌です。

多助が言いました。

「おい吾一よ、お城のお殿様が『生け花上手の娘』という催しをなさるそうだ」

「何だ？ それは？」

吾一が聞きますと、

「お殿様の前で花を生けて、一番上手な娘にご褒美を下さるんだと。そうだ!! お前の娘のお光みつをそれに出したらどうだ？」

「ダメダメ」

吾一は手をヒラヒラと振りながら、また酒をぐいっと一口…。しかし多助は、

「お前の家に行った時、山から切った竹筒に…」

「あれは俺が作ってやった」

と吾一。

「ハア？ 竹を切ただけだろうが。それに花が挿してあった。お光だろう。それになあ吾一、殿様からご褒美を頂ければ、もつとうまい酒がたくさん飲めるぞ」

多助も酔っ払っておりますから、いい加減なことを言います。酒飲みというものはどうしようもないもので、ついつい2人ともすっかりその気になり、盛り上がってしまいました。

さて、その話を聞いた光は大層驚きました。

光は、貧しい住まいの片隅に咲いている野の花

を大切にしておりましたが、「生け花」などしたことがありません。それにお城のお殿様など、とんでもない話です。嫌だと言つても、おとつあんは首を縦には振りません。

おまけに、町のお大尽の娘の里さとも出るのだから良いだろうと言います。里は、茶の湯、生け花、お琴などをたしなむ、気位の高い美しい娘だといううわさで、光は町で出会った時、あいさつをする程度で、親しく話したこともなく、ちつとも良くなんかありません。

さて、困り果てた光は、庭の片隅の野の花の所に行きました。そうして深いため息をつきました。すると、

「どうしたの？」

野菊の花が尋ねました。光が事の次第を話し

ますと、

「良いじゃない。やつてもみないで駄目だなんて思わないでね」

光はハツとしました。こんな小さな命に励まされるなんて、恥ずかしく思いました。

野菊の花はなおも言いました。

「私たちに目を留めない人たちに、私たちの美しさを伝えてね」

すすきや彼岸花が、そうだそうだとうなずいております。

その日から、光と草花の会話が始まりました。どうしたらこの花々を、美しく豊かに仕上げられるだろうかと、花の言葉に耳を傾けました。

いよいよお城に上がる日が来ました。

広間には着飾った娘たちが集まっております

す。光はといえば、前夜、おつかさんが嫁入りの時に持ってきたという晴れ着を出してくれたのですが、とても粗末な物で、おまけにおつかさんは小柄ですので、光は袖口から手がにゅーっと出てしまいます。それでも光はありがたいと思っております。居並ぶ娘たちは、光をさげすむような目で見ております。

そこへ様々な花が運ばれてきました。自分の好きな花を選んで生けるのです。

殿様と奥方様の前で次々と娘たちが花を生けるのを、光は一生懸命見ております。やがて、お大尽の娘、里の番が来ました。枝振りの良い木に花を添え、それは見事な出来栄でした。そして、最後に光の番が来ました。さて、花を見ますと、残り物ばかりです。光はその中に

野の花を見付けました。うれしさが込み上げてきました。「私たちが一番美しく見えるようにして：」と言った野菊の言葉がよみがりました。やがて発表の時となりました。

ご褒美を頂いたのはお里でした。光はそれは当然のことだと思いました。

と、そこへ女が一人やつてきて、光に、「奥方様がお呼びだ」と言うのです。

何事かと戸惑って奥方様の前に進みますと、「そなたは、あのような人が振り返らぬ野の花を、大層美しく生けましたね」とお言葉を頂き、その上に美しい布地を下さいました。

さて、外に出ますと、お里が待っていました。

「光さん、同じ町ですから一緒に帰りましょうね」

おしまい。



《昔むかし》

「3本の桜」

昔むかし、ある村に、かめきち 亀吉とさくぞう 作蔵というお百姓が隣合わせに住み、それぞれ田んぼを耕しておりました。その2人の家の前の空き地には、40年も経つ、とても立派な桜の木が3本ありました。

春です。桜の木は、美しい花を咲かせております。



亀吉は桜が咲くのを、とても楽しみにしておりましたが、一方、作蔵の方は、この桜の木が、もう不満の種だったのです。

なぜかと言いますと、田んぼの稲が育ち盛りの頃には桜の葉が茂って、お日様の光を遮り、秋にはたくさん枯れ葉が家の周りに落ちて、その掃除が大変なのです。

もちろん亀吉の家の周りも同じようになりませんが、亀吉はこの美しい桜をととても大切に思っておりますので、何の不平も感じてはいませんでした。

満開の桜を見に、村人が三々五々と集まりました。中にはむしろを敷いてお酒を飲む人さえありました。それを苦虫をかみ潰したような顔で見っていた作蔵の目に、更に団子屋まで団子を売

りに来て、何と花見のおかみさんたちは大喜びです。

そうでもなくても酔っ払って畑に入り込む人がおり、自分の土地で他人がにぎやかに騒ぐのを見て、すっかり頭にきた作蔵は、家の表に立っている亀吉を見付けて、

「わしらの土地でのこの騒ぎを、何とも思わんか？」

と尋ねますと、亀吉はニコニコして、

「土地なんて元々は神様のものだ。皆楽しそう
で良いではないか」

と答えます。

作蔵はなお一層頭にきて家に戻り、見当外れにもおかみさんに八つ当たりをし、ガミガミと叱り付け、そうして揚げ句の果てに、ハタと何

事を思い付き、おかみさんに言い付けました。

「明日の朝、早くに起きて団子を作れ」

「それをどうするのですか？」

とおかみさんが聞きますと、

「桜見物の奴らに売るのだ」

おかみさんは大層驚いて、

「家で食べるお団子は作れますが、人に売るお団子なんか作れません」

と言いますと、作蔵は、

「なーに、あの団子屋より一文安く売ればいいのだ。これで一もうけしてやろう」

さて、翌日のこと。初めは「安いから」と言

って作蔵のお団子を買っていた人たちも、「あ
つちの団子屋の方がうまい」と言って誰も見向
きもしなくなりました。作蔵は怒って残った団

子を畑にぶちまけました。

するとカラスがカアカアと言って、それをくわえて森に帰っていきました。作蔵はカラスにまで馬鹿にされていると一層怒り狂い、一目散に庄屋様の家に行きました。

「そういうわけで、あの桜の木を切ってしまいたいのですがねえ」

作蔵が言いますと、庄屋様は、

「作蔵よ、桜の身にもなってみろ、春には美しく咲いて皆を喜ばせ、夏には日陰を作ってくれ。それを突然切るといふ。人間の都合で、自分の命が決められるのでは、桜もたまつたものではないだろう」

「でも…」

と作蔵が不満そうに言いますと、さらに庄屋様

は、

「お前と亀吉は同じ年の同じ月生まれだろう。あの桜はお前の父親と亀吉の父親が、それを祝つて2人で植えた桜だ。知らなかったのか？」

それでも切るといふのなら、お前の木は一本半となる。一本半切れるか？」

さすがにこれには作蔵も頭を抱えてしまいました。庄屋様は、

「作蔵よ、まあ急せくな。時期を待て」

作蔵は、時期を待てとはどういうことか、桜が枯れるのを待てということかなど、考え考え帰りました。

秋になり、台風が来しました。それは恐ろしいほどの雨風で、作蔵は一睡もできませんでした。

明るる日に外に出てみますと、1本の桜の枝

が大きく折れておりました。作蔵は思わず、

「おとつあんの桜！」

と叫んでおりました。

さて、その後です。村の人々が、「桜見物のお礼だ」と言って、折れた枝の片付けはもとより、毎年毎年、落ち葉掃除を手伝ってくれたという事です。

おしまい。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送 日曜日 あさ4時30分

東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

